「寺子屋・四字成語」雑感-28

wò xīn cháng dǎn

臥薪嘗胆

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から

文と訳・有為楠（ういくす） 君代

久し振りに、日本でもお馴染みの言葉が出て来ました。

・➢・➢・➢・➢・➢・

春秋時代、呉と越の間に戦争が起こりました。越の国は戦争に敗れて、越王勾践（こうせん）は呉王夫差（ふさ）の馬丁となり、屈辱の限りを味わいました。暫くして、呉王夫差は、勾践がすっかり呉王に心服したとみて、勾践が越の国に帰ることを許しました。

帰国後、勾践は必ずこの仇を打つと決心しました。この恥辱を忘れないために、勾践は毎日薪の上で寝て、食事の前には苦い肝を舐めて、毎日毎晩、自分自身に言うのでした：

「お前は、国を滅ぼしかけたこの屈辱を忘れてはならない！」

勾践は一所懸命努力して政治を行い、越の国を徐々に強大にしていきました。

越王勾践は、このようにして長い間準備をして、最後に兵を挙げて呉の国を打ち破りました。

挿絵 満柏氏

・➢・➢・➢・➢・➢・

言葉の意味：薪＝薪にする小枝、燃料にする柴や草：胆＝苦い胆嚢。自分を痛めつけるほどに努力を重ねて自分を鍛える。

使い方：中国サッカーチームは、臥薪嘗胆、刻苦訓練（我慢して辛い訓練を重ねる）して、初めて世界で通用するようになる。

・➢・➢・➢・➢・➢・

このお話は日本でも良く知られていますが、ここのお話と違って、薪の上に寝るのは呉王夫差ですね。父王闔閭（こうりょ）が越に敗れ、かたき討ちを誓った夫差が、薪の上に寝て越への敵愾心を掻き立てた；呉王夫差に敗れ、捕虜となって屈辱を味わった勾践は、許されて帰国すると、この屈辱を忘れないために食事の度に、苦い胆汁を舐めて努力を重ね、国力の増大を図り、呉王夫差を破り、呉の国を亡ぼした：というお話ですね。

この本は臥薪も嘗胆も両方を勾践のこととしていますが、幼稚園児が対象ですから簡単に述べているのでしょう。しかし、中国の書物に出て来る「臥薪嘗胆」は少し複雑です。

そもそも「嘗胆」は、《史記》の中の「勾践世家」に今と同じお話が出て来ますが、「臥薪」はありません。言葉としては古くからあるようですが、特に呉越戦争に由来するとの記述はないようです。

「臥薪嘗胆」と一つにして使われた初めは11世紀の詩人蘇軾（そしょく）が「擬孫権答曹操書」（孫権になった積りで曹操の書状に答える）という文章の中だそうです。その後、「資治通鑑（しじつがん）」などにもとられ、通俗的な「十八史略（じゅうはちしりゃく）」を出典として、人口に膾炙するようになったようです。

このように四字成語一つ一つの　背後にある、元になったお話、どの本に初めて載ったか等々、細かいことを知ることが出来るのも、中国の人々が記録を残し、それが今に伝わっているお陰で、研究者のみならず、私達でもその経緯を知ることが出来るのです。有難いではありませんか。

それにしても、このお話の舞台となった、春秋・戦国時代は物語の宝庫です。特に長江沿岸の新興勢力であった呉と越に関わるお話はドラマチックで人々を魅了します。

因みに、劉邦（りゅうほう）の武将・韓信（かんしん）が、謀反の疑いを掛けられた時、「狡兎（こうと）（ずるい兎）死して走狗（そうく）（すばしこい犬）烹（に）らる」と慨嘆しましたが、この言葉は、越王・勾践の知恵袋、名宰相・范蠡（はんれい）が勾践の下（もと）から姿を消す前に言った言葉なのだそうですね。